

以下は、Anne McLellan Howard、Debra Occhiとカリフォルニア大学デーヴィス校の言語人類学の教授 Janet S. Shibamoto Smithとの会話を書き起こしたものである。Shibamoto Smith博士の日本人女性の言語に関する研究はよく知られている。このインタビューの直前に彼女は、国語(日本語)学者であり、日本語とジェンダー研究の先駆者である寿岳章子に敬意を表するためのセミナーを行った。Shibamoto Smith博士と Debra Occhi は最近、言語のイデオロギーと日本のテレビドラマに登場するヒロインたちに関する研究を行っている。

**Q: 現在、どのような研究をなさっていますか？**

Janet Shibamoto Smith: 今回行ったプレゼンテーションの内容は、実は私の現在の研究内容ではありません。ですから、一歩離れてまず、概観してみましょう。私は現在も、そしてこれまでも長年に渡って、日本語とジェンダーについて研究してきました。最近では、オックスフォードから、日本語とジェンダーそしてイデオロギーに関する本を共編著で出版しました。最近の興味は、最初に日本語とジェンダーについて研究するきっかけとなった、男性と女性の統語的差異から、文化モデルの研究へと移ってきています。

**Q: 最初の著書はどのようなものでしたか？**

JSS: 統語論に関するものでした。ある意味型にはまった日本語の女性ことばには全く関係なく、むしろ語順や格助詞と名詞句の削除に関係していました。そして、男性と女性のそれぞれが、同性ばかりのグループで、つまり同性の友人と話しているときに見られる性差が、より大きな意味での、「フレンドリーな会話とはどういうものか」に対する彼らの理解にどのように関係しているのかを研究したのです。私はそうではありませんが、「文化差モデル」のアプローチをとればこういう言い方になります。より語用論的な立場に立てば、同性の友人と話している

場合どのような共通理解がなされているのか、つまり互いに分かっていることだから言わなくていいことがあるわけですよ。そして、語順は、何を強調したいかということと関係ありますね。これが1970年代と1980年代に私が主に興味を持っていたことで、1985年にはアカデミック・プレスから日本人女性の言語に関する本を出版しました。その後、私はこれらの対象を長い間研究しました。しかし最近では、言語的に女性らしいことと文化モデルの関係に興味を持つようになり、研究は二つの方向に広がっています。ひとつは、言語的な女性らしさに対するメディアの影響、特にドラマのヒロイン像や架空の女性像が与える影響についてのものです。そして、最も新しい研究は、より民俗学的なプロジェクトで、方言、つまり標準語でも関西弁のようないわゆるよく知られた方言でも、また特にひどく馬鹿にされている方言でもないような、方言を話す地域に住む女性が、どのように方言を使って地元で連帯感を持ち、またどのように標準日本語から来る女性らしいことばを使って国民としての連帯感を持つのか、ということです。このプロジェクトには、着手したばかりです。

**Q: 現在の研究についてもっと詳しく話して頂けますか？**

JSS: 多分ここ6年から8年くらいの間ですが、恋愛小説に描かれたヒロイン像について研究

してきました。当然ながら、これらの小説は標準語で書かれており、いくつかの例外を除いて舞台がどこであっても、会話は標準日本語で書かれています。例外というのは例えば田辺聖子ですが――なぜ彼女のように年齢が高い作家について私がお話しているのか不思議に思われる方もいるかもしれませんが、コーパスは70年代にまで遡るのです――彼女の小説の中でさえ、まだきちんと分析したわけではないので、あくまでも印象としてはですが、女性の登場人物は、特にヒロイン、つまり女性の主人公は、大阪弁や神戸弁などを自由に使っている男性の主人公に比べると、会話の中ではより標準語に近いことばを使っています。つまり、方言をどれくらい使ってもよいかということに、いわゆるジェンダー差というようなものが存在しているように見えるわけです。Debra [Occhi] と研究しているのは、九州を舞台に設定したNHKの「朝ドラ」(朝の連続テレビ小説)の「わかば」です。前に「天花」というテレビ小説の研究を始めたのですが、舞台の大部分が仙台になってしまっているからですから、もしかしたら止めるかもしれません。今は、九州が舞台になっていて、宮崎弁と大分弁を使っている2つのドラマを研究対象に考えているところです。

Debra Occhi: 私たちはこれについての発表をモントリオールで行ったばかりです。何人かの女性登場人物やヒロインたちを比較しました。

JSS: この登場人物は非常に、つまり……

DO: 「宮崎らしい女の子」なのです。彼女の母親が宮崎出身で、神戸で震災にあった後、彼女は宮崎に戻り、そこで高校と大学に通います。

JSS: ええ、宮崎で。

DO: 不思議なことに、彼女は宮崎に住んでもまったく宮崎弁を習得しないのです。いつまでも「神戸の女の子」のままなのですね。これは、ヒロイン像を考えると非常に面白い現象です。

JSS: つまり私たちが研究しているのは、皆さんがテレビを点けて、特に目的もなく音声を聞いているときに、何によって誰が主人公かを理解するのか、ということなのです。確かに主人公の名前は大抵ドラマのタイトルになってはいますが(笑)。けれどもこれまで行ってきたテキスト分析から私が主張したいのは、Debra と研究してきたドラマにおいては、実際に主人公を「聞き分ける」ことができるということなのです。なぜなら主人公は標準日本語からくる文末助詞や代名詞などをより多く使い、地元方言からくる表現はほとんど使いません。今研究しているドラマ「わかば」では、よく知られた方言である関西弁が大量に使われているので、関西弁が標準語(標準日本語)の代わりになっているとも言えるのですが、標準語もあちこちで使われていて、これはもっと長い間宮崎に住んでいるという設定の女性登場人物や年をとり過ぎていて主人公にはなれないような登場人物の台詞にはない特徴です。つまり、標準語の女性らしいことばこそが、恋愛もので中心になっている登場人物の指標またはバロメーターではないかということです。恋愛が話の中心に置かれているドラマや、そのようなフィクションでも同じです。ひとつの例でたまたまこういうことがあったとしても、それは大したことはありませんが、同じようなことが小説の中で繰り返されるとすれば、つまり、標準語の女性らしい表現を使っていたり、敬語と共に標準語の女性らしい表現を使うことが――敬語の問題はより複雑です、実はシカゴでこれについての発表をしてきたばかりなのですが、とりあえず今はこの話は

置いておきましょう - - - 他の女性登場人物と主人公を区別するものだとすれば、そのようなドラマをいくつも見るうちに、たとえ特に注意してこれらのドラマを見ていないとしても、またはこれらのドラマの内容に興味を持っていないとしても、恋愛ドラマの女性主人公はこのような話し方をするものだというイメージが視聴者の中で育っていくのではないのでしょうか。視聴者の一人一人がこのような情報に実際頼っているかどうかは、今 行ってきたのよりもより民俗学的な研究が必要になりますが。

DO: 間違いなくモデルにはなっていると言えますよね。

JSS: ええ。このようなディスコースの存在によって、人は他の見方ではなく、ある決まった見方をするように訓練されるのではないかということです。これらのテキストは、大変有用な資源だと思っています。

Q: ジェンダーと言語の関係については、どのように興味を持つようになったのですか？

JSS: 実は、他のことがやりたくて大学院にいたのですが、1975年にRobin Lakoffの *Language and Woman's Place* が出版され、アメリカ人研究者たちに新たな研究対象を与えてくれたのです。念のためにお話すると、このような研究は日本では以前からありました。東京で行ったシンポジウムのテーマである寿岳章子氏の研究はまさにそのようなものでした。寿岳さんは日本語におけるジェンダーと言語について、遅くとも1963年からは出版活動を行っていたのです。彼女の著書「日本語と女」はRobin Lakoffの著書の数年後である1979年に出版されました。ジェンダーと言語についての寿岳さんの考え方はまったく異なるものだったのですが、不運なことに私はアメリカにいたのでそ

れについて知りませんでした。しかし、それ (Robin の本)は、アメリカの言語人類学者や社会学者、フェミニスト言語学者などの興味をひどくそりました。ですから、フィールドワークを行うために日本に戻ってきたとき、もともとやろうと思っていたこと - - - それは、メタ言語的気付きに関する発達言語心理学のプロジェクトだったのですが - - - の代わりにジェンダーを研究してみようと考え始めたのです。偶然にもその頃は70年代半ばのヴァリエーション社会言語学の時代だったのですが、その当時広く受け入れられていた仮説によると、ヴァリエーションというものは発音と語彙には存在するが、文法こそはスピーチコミュニティをひとつにまとめるものであり、ゆえに文法にはヴァリエーションが存在しないというものでした。当時国際基督教大学にいた井上和子氏は、1964年のチョムスキーのアスペクト(態)に関する本(*Aspects of a Theory of Syntax*)のフレームワークを使って、私にとっては大変役に立つ仕事を出版したばかりでした(井上1976)。氏は、英語の文法規則を見て、その枠組みに日本語の文法規則を当てはめ、日本語のすべての文法規則を研究するために便利な2巻にわたるマニュアル(笑)を完成させていたので、私はそれらの文法規則の性によるヴァリエーションを研究したのです。自分が住んでいた地域で、男性と女性の大量の会話データを集め、文法規則の分析を行い、そこに語順と語彙削除に関する文法規則上の大きな差異があることを見つけました。70年代後半のことです。当時、三鷹に住んでいたため、そこがフィールドとなりました。ジェンダーと言語に興味を持ったのはこのようなきっかけだったのです。博士論文のためには、これらの文法規則のみに焦点を合わせました。しかし後になって、このことが認められると、他のことについても考えるようになったのです。例えば、それがどのような意味を持つかを考え始めました。それが、文法性に影響を与えてい

ないのは明らかでしたが、男性たちや女性たちが会話相手をどう見るか、会話相手が何を知っているか、会話相手がどのように情報の流れを追うか、またはその情報の流れにどのように興味を持つか、などといったことには確かに関係しているのです。興味の焦点は、男性と女性が様々な方法でいかにして理解しあうのかということだったのです。そして、彼らが誰に理解してほしいと思っているのか、会話相手に対してどのような前提を持っているのか、ということに興味がありました。ですから、その頃は、80年代を通じてですが、同じ性別のグループだけを対象としていました。同じ性別のグループについて知られていることがあまりなかったものですから。そこから、文化モデルへと動いていったのです。ですからいつかしなければいけないことは、来世になるかもしれませんが、最初の段階に戻って、これらのことが - - - 介入やオーバーラップや相槌によって話者をサポートするのに失敗したというような古典的な相互作用ではなくて - - - これまでお話ししてきた男女差こそが男女間のコミュニケーションの問題のいくつかを引き起こしてきたのではないかということです。このように考えたので、文化モデルというものを考えるようになったのだと思います。最初から文化モデルに興味があったわけではないのですが、私データの分析が進んでいる方向はそれのようです。[このインタビューの続きは、語用論研究部会のホームページでご覧になれます。 [www.pragsig.org](http://www.pragsig.org)]

## 参考文献

- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge: MIT Press.
- 井上和子. 1976. 変形文法と日本語(上下). 東京: 大修館.
- Jugaku, A. (1979). *Nihongo to Onna (Women and Japanese Language)*. Tokyo: Iwanami.

- Lakoff, R. T. (1975). *Language and a Woman's Place*. New York: Harper and Row.
- Okamoto, S. & Shibamoto Smith, J. (Eds.) (2004). *Japanese language gender and ideology: Cultural models and real people*. Oxford UP.
- Onishi, K. (writer) (2005/9/27 – 2006/3/2). *Wakaba*. Tokyo: NHK.
- Shibamoto, J. S. (1985). *Japanese Women's Language*. Orlando, Fla.: Academic Press.
- Shibamoto Smith, J. & Occhi, D. J. (2006). Authentic femininity in two dialects of Japanese. Paper presented at a conference of the American Association of Applied Linguistics/ Association Canadienne de Linguistique Applique/ Canadian Association of Applied Linguistics, Montreal. AAAL/CAAL.
- Shibamoto Smith, J. (2006). グローバルなジェンダーとことばの研究からみた寿岳章子: モダンとポストモダンの枠を乗り越えた先駆者[Jugaku Akiko from the perspective of global language and gender research: a pioneer in overcoming the limitations of the modern/postmodern binary.] *Symposium on the future of language and gender research: Carrying on Akiko Jugaku's Program*. Tokyo
- Takeyama, H. (writer) (2005, 3/29 – 9/25). *Tenka*. Tokyo: NHK.

